

デジタル絵本でつながる幼小中高連携活動2 ：児童・生徒の評価

滝口圭子・綿引伴子・尾島恭子・松田洋介・
川谷内哲二*・橋本正恵**・服部浩司**・中田泉***・西多由貴江****

Collaborative Activity of Kindergarten, Elemental School, Junior High School and High School Related by Digital Picture Books (2) : Elemental School and High School Student Evaluation of Activity

Keiko TAKIGUCHI・Tomoko WATAHIKI・Kyoko OJIMA・Yosuke MATSUDA・
Tetsuji KAWAYACHI*・Masae HASHIMOTO**・Koji HATTORI**・
Izumi NAKATA***・Yukie NISHITA****

問題と目的

保育所・幼稚園等から小学校への就学や、小学校から中学校への進学は、比較的深刻な環境移行であるにとらえられ、その移行を支援する異校種間の連携及び接続実践の模索が続いている。保育所・幼稚園等、小学校、中学校が、子どもの育ちを支えるという共通の使命を中核に据えつつ歩み寄ろうとする気運が高まっているといえるが、報告される実践の多くは、幼稚園と小学校もしくは小学校と中学校という連続する2校種間での取り組みであり（お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター，2008；井口，2015；天野・河寄・植田・松浦・下村・寺垣内，2015），また，教科内容の系統的指導を実現するための一貫したカリキュラム構築に関する報告が多くを占める（竹早地区幼・小・中連携研究会，2015；菅・藤本・葛西・阪本・浦・金本・岡元・谷口・中馬越・永江，2015）。つまり，保育所・幼稚園，小学校，中学校の3校種，更に高等学校を加えた4校種の幼児，児童，生徒が同じ活動に取り組む実践事例の開発は，始められたばかりなのである。

金沢大学人間社会学域学校教育学類・附属学

校園研究推進委員会に属する技術・家庭科小委員会（委員長：綿引伴子）では，2012（平成24）年度より，幼稚園，小学校，中学校，高等学校という4校種での連携の在り方を積極的に模索し，実践の開発と成果の検証に取り組んできた（綿引・尾島・滝口・松田・川谷内・橋本・服部・中田・西多，2016；尾島・綿引・滝口・松田・橋本・中田・西多，2014；滝口・綿引・尾島・松田・橋本・中田・西多，2014）。2013（平成25）年度は，高校1年生が情報の授業で作成したデジタル絵本を，幼稚園児や小学生に紹介するという機会を設けることとした（綿引ら，2016）。

本研究の目的は，デジタル絵本の製作と発表に関する幼稚園，小学校，中学校，高等学校という4校種連携活動を試行的に実施するとともに，小学生及び高校生を対象とする質問紙調査の結果を分析することを通して，小学生と高校生のそれぞれに認められた学習内容を部分的に明らかにすることである。

方 法

調査対象者 デジタル絵本の製作と発表を中心とした幼小中高連携活動の参加者は，金沢大学

人間社会学域学校教育学類附属幼稚園年少1クラス30名、附属小学校1年生1クラス33名、附属中学校3年生4クラス約160名、附属高等学校1年生3クラス111名であった。連携活動後に、小学生はクラス担任教諭を通じて、高校生は情報授業担当教諭を通じて配付された調査票に無記名で回答した。幼児については、高校生によるデジタル絵本の発表を觀賞している時の行動について、大元・青柳（2012）が作成したチェックリストに基づき、クラス担任教諭が評定した。本研究では、小学生及び高校生を対象とした調査票の回答について分析及び考察する。

調査期間 高校生が作成したデジタル絵本を、幼児を対象に発表する活動は2014（平成26）年2月13日、20日に、小学生を対象に発表する活動は2月21日に実施された。

活動内容 高校生：情報の授業において、パーソナルコンピュータを用いて「幼稚園年少児向け」もしくは「小学校1年生向け」の絵本を作成した。絵本は4名で構成されるグループごとに作成し、起承転結の4枚について、1人が1枚ずつ担当した。最終的に、幼稚園年少児向けの絵本が20本、小学校1年生向けの絵本が10本、計30本の絵本が作成された。小学校1年生向けの絵本の作成に当たっては、1年生が実際に使用している教科書8冊（国語、算数、生活、音楽、道徳等）を参考にした。幼児向けの絵本の作成に当たっては、ビデオカメラで録画された幼稚園での幼児の様子を視聴する予定であったが、最終的には実施できなかった。デジタル絵本作成後、高校生が幼稚園もしくは小学校に赴き、グループに分かれて絵本を紹介した。

幼児：絵本の觀賞に際して、6名ずつの5グループに分かれた。幼児1グループにつき、高校生2グループを配置したため、幼児は2本の絵本を觀賞することとなった。教室の1グループ、プレイルームの3グループ、多目的室の1グループが、同時時間帯に絵本を觀賞した。以上の活動を、高校生のみが替わり、2日実施した。

小学生：絵本の觀賞に際して、6、7名ずつの5

グループに分かれた。小学生1グループにつき、高校生2グループを配置したため、小学生も2本の絵本を觀賞することとなった。教室の2グループ、ホールの2グループ、家庭科室の1グループが、同時時間帯に絵本を觀賞した。連携活動後、担任が「お礼シート」をグループに1枚ずつ用意し、小学生は自身が所属するグループのシートに一言ずつお礼のメッセージを書いて高校生に送った。

中学生：2014（平成26）年度に、家庭科の保育分野の授業において、ビデオカメラで録画された幼児と高校生との活動を視聴することとした。その後、絵本の評価や幼児の様子を確認を通して、発達について学習することを目指した。そのため、本研究では、中学生を対象とする調査結果の分析や考察については取り上げない。

調査内容 **小学生**：質問項目1「高校生が作ったパソコン絵本を見てどう思いましたか」については「1 絵がきれい」「2 絵が面白い」「3 お話が面白い」「4 お話がわからなかった」「5 もっと見たかった」「6 面白くなかった」「7 高校生の話し方が面白かった」という7種の回答選択肢から、質問項目2「高校生について、どう思いましたか」については「1 面白い」「2 優しい」「3 怖い」「4 大きい」「5 もっとお話ししたい」「6 今度遊んでほしい」という6種の回答選択肢から、複数選択を求めた。最後に「感想を書きましょう」と付した自由記述回答欄を設けた。

高校生：質問項目1（1）「幼稚園児・小学生に作成した絵本を披露してどう思いましたか」については、「とても嬉しかった」から「全く嬉しくなかった」までの5件法で、質問項目1（2）「この一連の活動は、小さな子どもを理解することに役に立ちましたか」については、「とても役に立つ」から「全く役に立たない」までの5件法で評定を求めた。続いて、質問項目2「絵本を製作するとき、どんなことを考えたり工夫したりしましたか」、質問項目3「絵本を幼稚園児や小学生に見せているとき、園児や小学生の

様子や反応はどうでしたか」、質問項目4「この活動を通して、自分の考えや気持ちなどで、変わったことはありますか。どんなことですか」、質問項目5「絵本の製作から絵本を見せるまでの全体を通して、学んだことや反省はどんなことですか」のそれぞれについて、自由記述回答

を求めた。

結果

(1) 連携活動を経ての小学生の意識

質問項目1「高校生が作ったパソコン絵本を見てどう思いましたか」の回答選択率を図1に

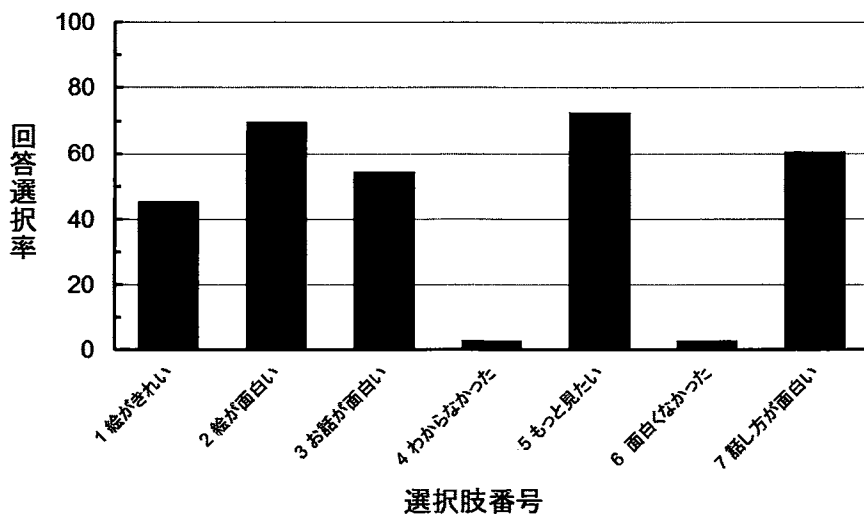


図1 小学生対象質問項目1の回答選択率 (%)

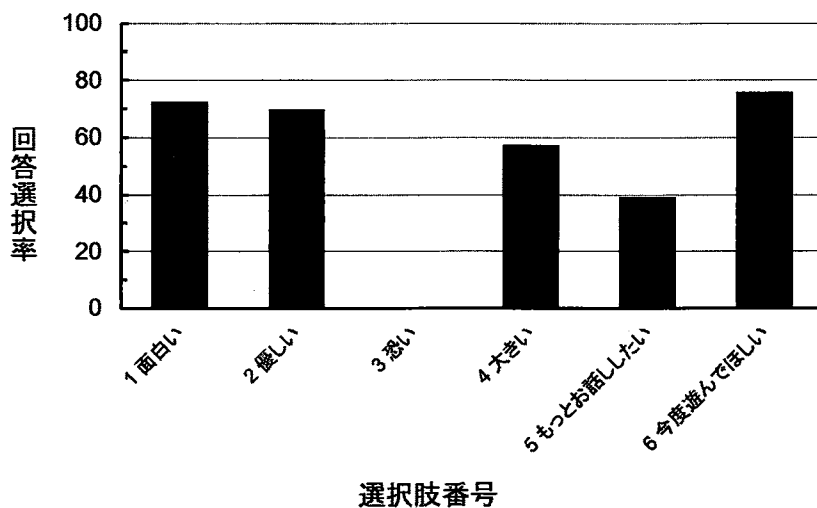


図2 小学生対象質問項目2の回答選択率 (%)

示す。小学生の回答選択率について、コクランの Q 検定を用いて検討したところ、有意差が認められた ($Q(6) = 101.39, p < .001$)。マクニマー検定による多重比較を行った結果、回答選択肢「1 絵がきれい」「2 絵が面白い」「3 お話が面白い」「5 もっと見たかった」「7 高校生の話し方が面白かった」の選択率が、「4 お話がわからなかった」及び「6 面白くなかった」の選択率よりも高かった ($p < .001$)。

次に、質問項目2「高校生について、どう思いましたか」の回答選択率を図2に示す。小学生の回答選択率について、コクランの Q 検定を用いて検討したところ、有意差が認められた ($Q(5) = 84.56, p < .001$)。マクニマー検定による多重比較を行った結果、回答選択肢「1 面白い」「2 優しい」「6 今度遊んでほしい」の選択率が、「3 怖い」「4 大きい」「5 もっとお話ししたい」の選択率よりも高かった ($p < .01$)。

(2) 連携活動を経ての高校生の意識

質問項目1(1)「幼稚園児・小学生に作成した絵本を披露してどう思いましたか」の回答選択率を図3に示す。 χ^2 検定により検証した結果、高校生が選択した回答に有意な比率差が認められ ($\chi^2(3, N = 111) = 31.31, p < .01$)、多重

比較の結果、回答選択肢「まあ嬉しかった」の選択率が、「とても嬉しかった」「あまり嬉しくなかった」よりも高く、また「どちらでもない」の選択率が「あまり嬉しくなかった」よりも高かった ($p < .01$)。

質問項目1(2)「この一連の活動は、小さな子どもを理解することに役に立ちましたか」の回答選択率を図4に示す。 χ^2 検定により検証した結果、高校生が選択した回答に有意な比率差が認められ ($\chi^2(3, N = 111) = 41.18, p < .01$)、多重比較の結果、回答選択肢「まあ役に立つ」の選択率が、「とても役に立つ」「どちらでもない」「あまり役に立たない」よりも高く、また「とても役に立つ」の選択率が「あまり役に立たない」よりも高かった ($p < .01$)。

考 察

以下、選択肢からの回答に関する分析結果に、自由記述で得られた回答内容を補足的に加えながら考察を進める。

(1) 連携活動を経ての小学生の意識

質問項目1「高校生が作ったパソコン絵本を見てどう思いましたか」の回答についてであるが、「1 絵がきれい」「2 絵が面白い」「3 お話が面白い」「5 もっと見たかった」「7 高校生の話



図3 高校生対象質問項目1(1)の回答選択率 (%)

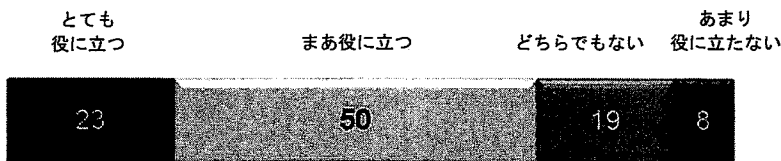


図4 高校生対象質問項目1(2)の回答選択率 (%)

し方が面白かった」という思いを抱いた小学生の方が、「4 お話がわからなかった」もしくは「6面白くなかった」と感じた小学生よりも多かったようだ。特に「2 絵が面白い」及び「5 もっと見たかった」は、7割の小学生が選択していた。一方で、「4 お話がわからなかった」及び「6面白くなかった」を選択した小学生はそれぞれ1名であり、自由記述の回答内容を確認したところ、「4 お話がわからなかった」を選択した小学生は「ぼくも、こう校生になったら、おもしろいはなしを1年生にきかせてあげたいです。そのときはいっぱい見せたいです」と記述し、「6面白くなかった」を選択した小学生は「すごかったです。またみたいです」と記述しており、回答選択の理由を自由記述から確認することはできなかった。

自由記述において、特にデジタル絵本に言及したものとして、「こう校生のつくったパソコンえ本がとても、おもしろかった。また、学校にきて、いっぱいあそんでほしい」「高校生がつくったパソコンえほんをよんで、高校生のひょうげんも、よかったしよみかたもおもしろかったので、またパソコンえほんをよんでもらいたいです」「こう校生と一すんぼうしをみたときに、おじいさんとおばあさんがうちゅうじんみたいで、一すんぼうしだけがにんげんだつたのでおもしろかったです」「高校生がモモジロウというももたろうをはなしてくれました。ももたろうがおすもうさんみたいでおもしろかったです。どろんここぶたもやってくれました。コンクリートのどろんこにはいつでれなくなることがおもしろかった」といった回答が得られた。

多くの高校生のグループは、一般的に知られている昔話や童話を採用していたが、デジタル絵本としてそのまま紹介するケースはほとんど認められなかった。例えば、登場する人物や動物の画像を変更したり、背景の画像を工夫したり、多様なメディアで流行している言葉を台詞に入れたり、物語の本筋とは関連しない部分を

変更したり、本筋とは関連しない部分を詳しく紹介したりと、高校生自身が面白いもしくは興味深いと判断する基準に基づいて、様々な改変がなされていた。そこには、デジタル絵本を鑑賞する幼児や小学生を楽しませたい、自分たちのデジタル絵本で楽しんでほしいという高校生の思いを読み取ることができる。多くの小学生は、高校生が随所に設けた仕掛けに対して、ある程度は高校生の期待通りに好意的に反応し、楽しんでいたように見受けられたが、そのことが自由記述の回答からもうかがえた。

デジタル絵本の鑑賞以外の活動についても、「こう校せいがかいたドラえもんがきれいだからぼくもえがきれいになりたいです」「おはなしがみじかかったけど、さいごになにをかいたかをあてるのをやったのでとてもおもしろかったです」「こう校生のひとがクイズをだしてくれてえをかくのがじょうずでそうゆうえをかきたいです」「きょうは、こう校生が、かぐやひめと、おおきなかぶを見せてくれました。あと、さいごAKBのうたでみんなおもしろくて大わらいしてもらいました。さいごに、こう校生が、かみに、ふなっしーをかいてくれました」「さいごに、おにごっこをしたよ。こう校生がおにで、はしるのがはやかったよ。またこんどあえたらいいな。たのしかったよ」「こう校生といっしょにふえおにやいろいろなおにごっこがたのしかった」といった記述が得られた。デジタル絵本の発表が比較的早く終わったグループもあり、その場合、残りの時間を幼児や小学生と一緒に過ごす必要が生じたが、手品を見せたり、持参の絵本を読んだり、絵を描いたり、状況に応じて行動できていた高校生もいた。

2013（平成25）年度に本研究の活動に取り組んだ高校1年生の中には、前年2012（平成24）年度の中学3年生の時に、技術・家庭科小委員会が運営した幼小中連携活動「中学生を幼稚園に招いてお弁当交流会」や「幼児を中学校に招こう」（尾島・綿引・松田・滝口・橋本・西

多・中村・中田, 2013)に参加した生徒もあり, 高等学校情報授業担当教諭によれば, そうした生徒は, ある程度の予測と余裕を持ち, 当日の余剰時間や活動停滞時にも対応できるよう何らかの準備をして活動に臨むことができていたようだ。デジタル絵本の観賞の際には, 小学生と高校生とが直接やり取りをすることはほとんどないが, 絵本鑑賞後の活動では, 双方が絵本の台詞や台本ではなく, 自身の言葉で対話をする場が生まれる。生身のやり取りを通して, 小学生は, 高校生に対して親近感を, あるいは憧憬の念を抱いたことであろう。

次に, 質問項目2「高校生について, どう思いましたか」の回答についてであるが, 7割の小学生が「1 面白い」「2 優しい」「6 今度遊んでほしい」を選択しており, 「3 怖い」「4 大きい」「5 もっとお話ししたい」と感じた小学生よりも多かったようだ。自由記述を確認したところ, 「とても大きくて, びっくりしました。けれども, とてもおもしろいおはなしをよんでもらいました」「こう校生のしゃべりかたがおもしろかったです。もっともおしゃべりがしたかったです。こう校生ともっとあそびたかったです」「こうこうせいとはなせてうれしかった」「こんどは, うんどうじょうで, おにごっこをしたい」「こう校生がやさしかったので, わたしもいもうとにやさしくしてあげたいなとおもいました」といった回答が収集された。

ほとんどの小学生が, 高校生に対して肯定的な印象を抱いたと判断してよさそうだ。もっと一緒に過ごしたかった, もしくはまた一緒に遊びたいといった内容の記述が多く見受けられ, 小学生にとって高校生は, 活動前と変わらず大きい存在ではあるであろうが, それだけではなく, 自分たちと関係を作ることができる存在でもあるという認識を新たに持つことができたかもしれない。小学校クラス担任教諭によれば, 小学校1年生がより年長者と連携する場合, これまでは小学校6年生が最年長の連携対象で

あった。つまり, 多くの小学校1年生にとって, 本研究における活動は, 正に高校生とふれあう初めての経験となっており, その点においても極めて貴重な機会になったと評価された。

(2) 連携活動を経ての高校生の意識

質問項目1 (1)「幼稚園児・小学生に作成した絵本を披露してどう思いましたか」の回答については, 「まあ嬉しかった」もしくは「どちらでもない」と評価した高校生が多かった。「とても嬉しかった」と「まあ嬉しかった」とを合わせると, 6割の高校生が活動に対して肯定的な感情を抱いていた。その一方で, 3割が「どちらでもない」, 1割が「あまり嬉しくなかった」と評価していた。本活動が全ての生徒にとってポジティブな感情を抱く経験となったわけではないようである。幼児や小学校1年生という年齢の離れた他者を対象に自作のデジタル絵本を発表するという初めての取り組みにおいて, 全ての活動が高校生の予想通りに展開するといったことは考えにくく, そうした状況において, 高校生が多様な感情を抱くことは当然であるように思われる。以下, 高校生の自由記述回答について, 幼児もしくは小学生という連携活動の対象ごとに抜粋して紹介する。

まず, 幼児を対象にデジタル絵本を披露した生徒についてである。「高校生とは違って素朴なネタでもおもしろがるが, まったく興味がないと本当に何も反応がない。自分たちがおもしろいと感じることではなく幼児の目線になることが大事Butむずかしい」「主語と述語など, 言いたいことを端的に示していくことの必要性を感じました」「幼児に10分間も話を聞かせるのはカンタンだろうと思っていたが, 思ったよりも難しくて苦労した。もっと幼児を引きつけるような絵本や話し方をしないといけないと感じた」「退屈そうであった。申し訳ない」「どんな風にすれば幼児はよるこんでくれるかと必死に考え, 分かりやすくつくりました」「難しいことを伝えようとせず, 楽しませるようにすると

意味がある」「分かりやすい言葉で接することが大切だと思いました」「幼稚園児は自分も参加できるものが好き」といった記述が見受けられた。

次に、小学生を対象にデジタル絵本を披露した生徒については、「ウケをねらっていないところでも爆笑された」「意外なところではしゃぐなあと思いました」「子供はよく分からない所で笑うことを知った」「1年生が絵本に対してつつこみ、質問をしてくることを想定していなかった」「絵本に関しては、話の内容やセリフよりも、動きや文字に工夫をこらした方がよいのだと学んだ」「おもしろい作品にしようとこだわった」「難しい言葉や漢字は使わない」「一番重要な場面を具体的に説明する工夫をした」「どのようなストーリーにすると、子供受けするのか、1年生に興味をもたれるのかを考えながら作った。単純かつ面白い話ができるよう、ふき出しや絵、音声の使い方を工夫した」といった回答が得られた。

高校生は、幼児や小学生を楽しませようと工夫を凝らし、多様な仕掛けを設けていたようであるが、努力が実り楽しい時間を過ごすことができたグループもあれば、自分たちの予想とは異なる反応に戸惑いを覚えたグループもあったようだ。しかし、多くの高校生はそうした結果を客観的に受け止め、改善策を具体的に示している点が興味深い。

質問項目1(2)「この一連の活動は、小さな子どもを理解することに役に立ちましたか」の回答については、「まあ役に立つ」と評価した高校生が最も多かった。加えて、「とても役に立つ」と評価した高校生の方が「あまり役に立たない」と評価した高校生よりも多かった。「とても役に立つ」と「まあ役に立つ」とを合わせると、7割の高校生が本活動が子ども理解に有効であると評価しており、その点は特筆に値する。以下、質問項目1(1)と同様に、自由記述回答を幼児もしくは小学生という連携活動の対象ごとに抜粋して紹介する。

まず、幼児を対象に活動した生徒についてであるが、「改めて感じたことは、小さな子と触れ合うのが大変だということです」「幼児と仲良くなる方法が全く分かっていないということが分かった」「子育ては大変だと感じた」「幼稚園児はコワイ」「幼稚園の先生ってすごい人たちだと思う。あんな子供たちをまとめられるなんて」「子供の扱って思ってたよりすごい大変。親ってすげえ」「身ぶり手ぶりで伝えると、分かってくれるなと思いました。かわいかったです。歌など歌ってひきつけることが大切でした!」「幼児はなかなか思い通りにいかないが、一生懸命コミュニケーションをとろうとすることで何だかかわいらしさが伝わってきた」「幼児は今の私たち以上に個々の特徴がでていて面白い」「自分が思っているよりも沢山のことを知っていて、子供の見かたがすこしかわった気がします」「自分達には普通のことであっても、幼稚園児には難しく感じるような場面が多々見うけられた。人に物を理解してもらうことは予想以上に難しいと感じた」「自分達ではわかるつもりになっていたけれど、子どもの視点でみれば難しかったかもしれないし、相手の視点からつくらないといけないと強く感じた」「これからも人のことを考えて、生活していきたいです。幼児はかわいいなと思った」という記述が収集された。

次に、小学生を対象に活動した生徒については、「高校生と小学生は、ものの考え方や反応が全然違うということ」「子供の目線に合わせることが大切だと思った」「幼い子はやはり苦手だと思った」「静かにきいてくれると思っていましたが、なかなか話をきいてくれなかったりしたので、もう少しきいてくれる工夫をすればよかった」「1年生は思ったよりも幼かったが、話はしっかりきいてくれた」「小さい子は意外と厳しい。思ったより頭がいい」「小学生は案外に物事をしっかりと見ている」「意外と素直に話を聞いてくれていて、あまり言うことをきかないと思っていましたが、考えが変わった」

「思っていた以上に楽しかった。小学生のテンションが上がりすぎていて絵本後が大変だった」「苦労して作ったものを喜んでもらえると嬉しいものだと思った。幼い子を扱うのは苦手だったが、来てくれた子とは、仲良くふれあえたと思う」「実際に小学生とふれ合えてよかった」「意外と男子の方が子どもの扱いが上手だった」「子どもが少し好きになった。子どもと接するのはおもしろい」「人と接するのが上手になりたい」「伝えたいことを子どもに伝えるのはむずかしいと思った」「子どもであっても、自分たちの思いはちゃんと届くのだと思うようになった」「他人が喜んでる姿を見ると自分もうれしくなる」「人を楽しませることの楽しさ、嬉しさを学んだ」「チームの協力が大事」という回答が認められた。

以上から、本活動を通して、高校生が、幼児や小学校低学年の子どもをより多面的にとらえられるようになったことがうかがえ、数は多くはないが、子どもに対する認識を新たにしているケースも認められた。本活動が高校生の子ども理解に及ぼす影響が、自由記述からも確認されたといつてよいであろう。のみならず、高校生は、自身が情報を発信する相手である他者を的確に視野にとらえた上でのプレゼンテーションの準備の必要性、他者を楽しませることや他者と楽しさを共有することで得られる充実感、他者と協同して一つのことをやり遂げる達成感なども、本活動を通して学んでいるといえるであろう。加えて、自由記述においては、子育ての大変さや親の役割に言及する高校生もおり、本活動が親準備性を高める教育としての意義も持ち得る可能性があることが示された。

(3) 今後の課題

まず、高校生の活動における情報と家庭科との連携についてである。例えば、情報の授業においてデジタル絵本の作成に取りかかる前に、家庭科の授業を活用しながら幼稚園や小学校での観察を実施し、高校生が具体的な経験を通し

て子どもを知る機会を設けることが考えられる。また、デジタル絵本の作成と発表後、再度家庭科の授業を通して、子どもの発達を踏まえながら活動を振り返ったり、子どもや子どもを取り巻く周辺の事柄について多面的に評価したりする機会を確保するといったことが提案される。情報と家庭科を含む高校の教科のカリキュラムの構成上、実現は困難であると想定されるが、自由記述で確認された高校生の学習内容の更なる定着を考えた場合、何らかの手立てを講じることができればと考える。

次に、収集された回答の分析について以下の3点が挙げられる。1点目は、高校生の質問項目1(1)及び1(2)の回答を、幼児もしくは小学生という連携の対象に分けて分析することである。本研究では、連携の対象を考慮せず一括して分析したが、実際の活動を観察した印象としては、小学生との連携活動よりも幼児との連携活動において、困惑している高校生が多かったように見受けられた。連携の対象別に分析することにより、新たな知見が得られるかもしれない。

2点目は、予め用意された選択肢から回答を選択する質問項目の結果と自由記述回答の内容との照合である。活動を評価する回答を選択した、もしくは選択しなかった小学生や高校生の自由記述回答をそれぞれ詳細に検討することを通して、小学生や高校生が活動を評価する根拠もしくは評価しない根拠や、活動を改善していく上での方向性がより明らかになるかもしれない。

3点目として、高校生がこれまでに取り組んできた幼児や小学生とのふれあい体験の頻度や内容を調査し、そうした過去の体験と本活動の評価との関連性を検討することが挙げられる。前述したように、本活動実施の前年度の中学3年生の時に幼小中連携活動に取り組んだ生徒は、幼児とのやり取りに比較的慣れており、デジタル絵本の発表においても、余剰時間の活用においても、適切な振る舞いができていたよう

であった。高校生のこれまでの経験の違いを踏まえた分析を実施することにより、連携活動を蓄積することの意義についても検討することができるであろう。

今後、幼児の活動を評価する指標を開発し、また中学校との連携活動のあり方を模索しながら、4校種連携活動を通しての幼児、児童、生徒のそれぞれの学習内容を丁寧に記述していくことが求められる。

引用文献

- 天野秀樹・河野祐子・植田敦三・松浦武人・下村哲・寺垣内政一 2015 小・中を円滑に接続する関数指導のあり方：小6と中1の比例学習に着目して 広島大学附属東雲中学校研究紀要 中学教育, 46, 35-42.
- 井口眞美 2015 幼保小接続期の保育・教育をつなぐ視点の開発(その2)：幼小連携研究の変遷と現状 実践女子大学生活科学部紀要, 52, 45-53.
- お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター 2008 「接続期」をつくる：幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働 東洋館出版社
- 大元千種・青柳恵里香 2012 絵本に対する幼児の関心に及ぼす読み聞かせのグループサイズの影響 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 7, 167-178.
- 尾島恭子・綿引伴子・松田洋介・滝口圭子・橋本正恵・西多由貴江・中村正寛・中田泉 2013 大学・附属学校園における連携活動の検討：家庭科を中心とした実践事例から 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 5, 45-53.
- 尾島恭子・綿引伴子・滝口圭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江 2014 大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討(1)：みそ汁作り・お弁当交流会の事例から 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要 教育実践研究, 40, 27-36.
- 菅裕・藤本いく代・葛西寛俊・阪本幹子・浦雄一・金本志秀・岡元雅代・谷口朋美・中馬越恵美・永江彩乃 2015 幼・小・中連携による歌唱技能の発展的指導：歌唱領域達成課題系列の作成 宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センター研究紀要, 23, 75-89.
- 竹早地区幼・小・中連携研究会 2015 幼・小・中連携カリキュラムの検証：主体性を育む手立てを考える(研究の概要) 東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校研究紀要, 26, 6-9.
- 滝口圭子・綿引伴子・尾島恭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江 2014 大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討(2)：みそ汁作り・お弁当交流会についてのインタビュー調査の結果から 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属教育実践支援センター紀要 教育実践研究, 40, 37-47.
- 綿引伴子・尾島恭子・滝口圭子・松田洋介・川谷内哲二・橋本正恵・服部浩司・中田泉・西多由貴江 2016 デジタル絵本でつながる幼小中高連携活動1：活動概要と担当教員・観察者の評価 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 8, 49-60.